

---

# IS 喜楽にいきましょう 改

ネコ削ぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 喜楽にいきましょう 改

### 【Nコード】

N3377Y

### 【作者名】

ネコ削ぎ

### 【あらすじ】

分かるか？ なんとなくて育てた子供が今や立派な男になって私はとても嬉しいんだ。嬉しいんだが、まさか面倒な事になるとは思わなかった。何故ISなんて物を起動出来たのか？ まあ、諦めてIS学園に行かせるしかないな。それにしても、まさかアイツ等とは別にISを動かせる男が現れるとは。不思議なものだ。……関係ないな。私としてはアイツ等が楽しく学園生活を送ってくれるのなら。

この作品は『IS 喜楽に生きましよう』のリメイク版です。内容を  
変更しましたのでお気軽にご覧ください。

すり替わりー夏の第1話(前書き)

やっぱり明るい方が執筆しやすいです。

## すり替わり一夏の第1話

教室の真ん中の最前列はとてもプレッシャーを感じてしまうことに初めて気がついた。何となく嫌な席であることは知っていたが、実際に体験してみると明確に嫌なものとして理解出来る。

目の前には教卓があり、先生と対面しながら授業を受けなくてはならないものだから授業中に気を抜いていることが出来ない。後ろには沢山の生徒達が席に座っているのです。その視線を感じてしまう。多少の身動きをするだけで後ろの反応を気にしてしまい、なかなか落ち着けない。

ただ、嬉しいことがある。

このクラスのほぼ全員が女の子であることだ。現実に具現化した男の夢だ。ザ・ハーレム、マジで時よ止まれ！！

少し気になることもあるのだ。

それは後ろの席に居る。

「みなさん、そろっていますね。それでは、これから一年間よろしく願います」

と、山田先生の登場だ。

少しサイズの合わない服からでも自己主張をしている胸が凶悪な小動物っぽい女性だ。そこに視線が向かってしまうのは男の性だな。

それにしても原作の一夏と言う奴は苛立ちを感じさせるくらいの鈍感野郎だ。人の特に異性の好意に気づけないなんてのは酷すぎる。

だから、俺が一夏となってこの世界に降臨したんだ。一夏の代わりにヒロインズの好意を全て受け入れる。俺なら上手くやれる。たとえ俺の知らない変な奴がいたとしてもな。

「織斑くん」

「はい」

いつの間が始まっていた自己紹介が俺の番になったらしい。

俺は席を立って後ろを向いた。

視界のほとんどに女子が映りこんでいて、思わずニヤリと笑ってしまいそうになる。

だが、この状況で笑ってしまったのはドン引きされてしまうかも知れない。出来る限り平常心を装って挨拶をする。

「えーっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

原作通りの内容での挨拶だが、いきなり歯の浮くような台詞を言って原作の流れから逸れるのは良くない。まだ始まったばかりなのだ。最初だけは一夏と同じ感じでやれば話が進む。後は腕の見せ所。

女子達は俺が次に何かを言うことを期待して待っている。ここで期待に応えられない罪悪感があるのだが、今は仕方ない。

「以上です」

俺が終了の言葉を放つとお笑い芸人みたいにずっとこける女子が何人かいた。

期待を裏切ってしまったって申し訳ないなと思っていると、後頭部に強い衝撃が走った。

「いつ!?!?」

痛みに耐えながら振り返れば、俺の姉である織斑千冬が出席簿を持つて、その存在感を撒き散らしていた。

ここまで音も気配もなく人の頭を叩くのか、我が姉は。恐れるべきなのか、感心すべきなのか分からないのだが、とりあえずめちやくちや痛い。

「げえ、関羽!？」

もう一度叩かれる。心構えはしていたが、痛いものは痛い。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

別に良いだろう。肩書きに三国志の英雄が加わっても。もう既に有名人なのだから。

そんな俺の考えなど微塵も分からない千冬は山田先生と会話した後、俺達に演説を始めた。

有名人の演説にクラスの女子達は黄色い声援を飛ばしてあれやこれやと好き勝手に喋り始めたのだ。

千冬が明らかにうつつとおしそうにしているが、それがさらに女子達の勢いを強くするだけであった。

「で、まともな挨拶も出来ないのか、お前は」

「いや、千冬姉」

「織斑先生と呼べ」

「織斑くんって千冬様の弟？」

「いいな、代わってほしいな」

「席に着け馬鹿者」

原作に忠実な流れでスイスイと進む。

俺が座れSHRが終わり、早速授業が始まる。そして訳の分からない授業で苦勞するんだな……原作の一夏は。

なんて思っていたが、原作と違う流れが現れた。

「まだ、少し時間があるな。では残り時間で出来る限りの自己紹介をしてもらう」

初めて聞く台詞に一瞬俺の思考が停止した。知らない流れだ。

後ろで誰かが席を立つ音が聞こえてきたので、反射的に後ろを向いてしまう。

千冬に叩かれてしまうかと思ったが、自己紹介している人の顔を見て良いので叩かれることはなかった。

席を立つて周りの注目を集めているのは、黒髪の少年。俺と同じか少し高いくらいの身長で眼鏡をかけて笑顔を見せている。

「はじめまして。舞月砂喜まいしき かなです。よろしくお願いします」

ゆったりとした動作で頭を下げた砂喜が腰を下ろすと、後ろに控えていた先ほど自己紹介をした人物と同じ顔をした者が立ち上がる。眼鏡はかけていないみたいだが。

「舞月遊樂まいしき ゆうりです。よろしくどうぞ」

ニコリと笑う遊樂。無邪気な笑顔だ。さっきの奴は温まるような笑顔だったが。

てか、コイツ等は一体なんなんだ！？ 俺は知らないぞ！！

## 眺める砂喜の第2話

皆さんの自己紹介が終わればすぐに授業になります。学ぶことが好きな方々には嬉しい状況でしょうか。良いですね、嬉しく感じる人が居てくれて。

それにしても限界まで授業を詰め込んでいますので、勉強嫌いには辛い仕打ちですね。ボクもそこまで勉強が好きではないので辛いです。

一限目の授業は適当に聞き流す程度の力加減で挑みましたので、幾つかの要点を聞き逃してノートをとり忘れてしまいました。

でも大丈夫でしょう。遊樂がいますから。きっとボクが聞き逃したところの内容を書いているはずですよ。

席に着いたままで体を後ろに向けるとボクと同じ顔をした遊樂がニコニコと笑顔を浮かべている。

みんなはボク等が瓜二つで見分けが付かないと良く言います。それで良く名前を間違えてしまいますから、あんまりいい気はしませんね。もう慣れましたから良いですけど。

「遊樂、ノートを見せてください」

「砂喜、ノート見せてくれな」

……あれ？　もしかして同じところを写していないとかはありませんよな？

遊樂も同じ事を思っているようですね。そんな顔をしています。

まずは互いの写していないところを確認すべきですね。同じところでないことを祈りながら。

せーのでノートのお互いのノートを机の上に広げて目を通す。

良かった、被っていません。  
安心してボク等はノートを写しあって僅かな休み時間を消費しました。

二限目の時間になりました。休み時間の全てをボク等と織斑くんへの好奇の視線を向けていた女子生徒の皆さんも、今は授業に集中しています。

若干いじられキャラに認定されかけている山田先生は教室の雰囲気  
に気を良くして、先生らしい堂々とした授業を展開していました。  
嬉しそうですね。

それに比べて織斑くんときたら。とても挙動不審で少し気になります。  
す。挙動不審が明らかにおかしな挙動不審で。なんて言えば良いの  
でしょうか？ わざとらしい挙動不審とでも言いましょうか。  
うーん、目立ちたいのですかね？  
まあ、放っておきましょう。ボクに出来ることなんてありませんの  
で。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

一限目とは違い、二限目は真面目に取り組んでいる時に急に聞こえ  
た自信の含んだ声。

顔を上げなくても声の主は判別出来ませんが、その声の主である山田  
先生が口にした「織斑くん」と言う家族の証。この教室に織斑は二  
人居ますが、生徒の方の織斑くんでしょう。

その織斑くんがどうしたと言うのでしょうか？ 授業内容で理解出  
来ない場所でもあったのでしょうか？

「分からないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生

ですから」

とつても自信に溢れるその姿にボクは頼られることが嬉しいんだな  
と思いました。

もし、困ったことが出てきたら山田先生を頼ってみましょう。

「先生」

「はい、織斑くん」

「ほとんど全部分かりません」

瞬間、山田先生の全ての機能が停止しました。再起動にどれく  
らいの時間を要するのでしょうか？ 授業が終わる前に蘇ることを  
望みますよ。

「え……。ぜ、全部ですか？」

意外に早く再起動を果たした山田先生。引きつった顔をしています。

「えっと、織斑くん意外で今の段階が分からない人はどれくらいい  
ますか？」

外の音がはつきりと聞こえてしまうくらいに、この場の空気が死に  
絶えていました。

誰一人として手を上げない事態に山田先生は僅かに安堵の表情を浮  
かべました。

織斑くん。一応、入学前に参考書が配布されたはずなのですが、勉  
強してなかったんですか？

ボクも遊楽もちゃんと目を通したので大丈夫ですよ。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の端に控えていた織斑先生が織斑くんの方に向かいながら質問してきます。

授業が静かなのは、やっぱり織斑先生が居るからなんでしょうね。

山田先生頑張ってください。

「古い電話帳と間違っ捨てました」

その言葉を言い終わった瞬間に織斑くんは出席簿で叩かれました。突然ですが、気になることがあります。何故織斑くんは参考書を捨ててしまったのでしょうか？ 古い電話帳と間違えて捨てたことを何で知っているのでしょうか？ 普通は間違えて捨てたのなら間違えに気づかないままなのではないのでしょうか？ ああ、捨てた後にあった物がなくなっていれば気づきますね。それにしても、表紙も確認せずに捨てたのでしょうか？ 間が抜けてますね。

「必読と書いてあったらろつだ馬鹿者」

今の世の中、教育現場での体罰って駄目じゃありませんでしたか？

「あとで再発行してやる。一週間以内に覚える」

「……やります」

自業自得ですね。ボクには関係ありませんからとてもどうでも良い話の内容です。

こうして授業再開と思っていましたが、織斑先生の説教と山田先生の意味の分からない妄想を展開してしまって再開しませんでした。

### 見るだけ砂喜の第3話

「ちょっとよろしくて？」

二限が終わったの息抜き程度の休み時間に教室内に響き渡る上品そうな言葉。

後ろの方に体を向けて遊樂とたわいもない会話をしていたボクの耳にソレが飛び込んできました。

何事かと声の発信源に顔を向けると、織斑さんの席の近くに一人の女子生徒がいました。

腰に手を当てている格好の女子生徒はこの学園において、そこまで珍しくない外人さんです。金髪に少々ロールした髪が高貴なイメージを浮かべさせてくれます。物腰からして実際に高貴な人なのかも知れませんか。

「聞いてます？ お返事は？」

そんな高貴なお方が織斑さんに話しかけています。

「あ、ああ。聞いてるけど……どういう用件だ？」

なんか織斑さんの返事が変ですね。苦手意識があるような表情をしているんですけど、声色にはそのようなものは感じない気がします。むしろ、喜んでいるのでしょうか？

「まあ！！ なんですの、そのお返事」

気に障る言い方をしてしまったらしいですね。高貴さんが突っかかっけきちゃいました。

「わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

もしかして王族さんなのでしょうか？ それとも自分大好きさん？  
そういえば、最近の女性の傾向でしたね。ISは原則女性にしか動かせませんから、その優越感で尊大な態度で接してくると言っね。  
心の中で「織斑くん、さよなら」とでも言いますか。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

本当に織斑くんとはさよならでしょうか？ 自己紹介の意味がまったくありませんね。

それにしても織斑くんは高飛車さんを怒らせるのが得意ですね。身が持ちませんよ。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？」

ああ、思い出しました。クラスのほとんどの名前と顔がバラバラでしたが、たった今、一人の名前と顔が合致しました。  
セシリア・オルコットさん。イギリス代表候補生にして

「入試主席のこのわたくしを！？」

入試主席さんでしたね。まさにエリートですね。  
問題は織斑くんがきよとんとしていることです。

「質問いいか？」

「ふん。下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしく

てよ」

胸を張って質問を許してくれるオルコットさん。判明しましたが、貴族みたいですね。

良いですね、何でも良いので大盤振る舞いしてくれませんか？ したら皆さん凄く喜びます。ちなみにボクも。

のんきに事態を眺めていると、背中を突かれます。

「あのオルコットって奴、楽しそうだな」

後ろから遊樂の声が聞こえてきます。

オルコットさんの様子を楽しいの一言で片付けてしまうとはやりますね。

「喜んでるように見えますけど」

あれは自分の存在を周りに見せつけて意識してもらつたの喜んでるんですよ。

「代表候補生って、何？」

……早く次の授業が始まりませんか？

やることもないので次の授業の準備でもしますが。教科書とノートを出して終わりですけどね。ああ、筆記用具を出していませんでした。

「あなた、本気でおっしゃってますの！？」

本気も本気ですよ。別にボクは勉強が好きと言う訳ではないんです

が、授業が始まってから道具を出すのが嫌なんですよ。なんか余裕がないような気がして。

「おう、知らん」

知らない？ それは残念ですね。まあ、人によって様々な考えがありますからボクの考えが絶対、貴方の考えは間違っているなどとは言いません。

では、用意するものは用意したので、二人のやり取りを周りの皆さんと一緒に拝聴しますか。

お互いに言い合うなんて、それほど仲が良いんですね。素晴らしい言葉の応酬にボク達の入り込む余地はありません。

「なにせわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

エリート中のエリートですか。頑張つて勉強したんですね。その頑張りを喜んで祝福してあげます。もちろん心の中での話です。

「俺も倒したぞ、教官」

織斑くんの何気ない言葉でオルコットさんが固まってしまいました。……あつ！！復帰しました。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

若干声が震えていますよ、オルコットさん。もしかして怒っています？

「女子ではってオチじゃないのか？」

おいおい、オチって何だよ、オチって。……オチはないでしょう。もう少し言葉を選んであげてくださいよ。

「つ、つまり、わたくしだけでない？」

必死に怒りを抑えているって感じですね。爆発しないでほしいのですけど。

「いや、知らないけど」

君は愚かなんですね、織斑くん。なんで爆発を招くことを言うんですかね。

呆れてものが言えないとはこの事ですかと思っていましたら、オルコットさんが急に此方を向いた。

「貴方！！ 貴方達も教官を倒したって言うの！？」

ええ！？ どうして此方に飛び火するんですか！！ おかしくありませんか！！ あまりに理不尽です！！

凄い形相で此方を睨んでくるオルコットさんに、ボクは笑うしかありませんでした。

「残念だけど、私と砂喜は教官に負けたぞ」

代わりに遊樂が答えてくれました。

ボク等の答えに満足したのか、少しだけ表情を和らげてくれました。そのオルコットさんの表情を見た織斑さんはなんでかは分かりませ

んが驚きの表情を浮かべていました。

うーん、なんででしょうかね？

## 巻き込まれた砂喜の第4話

「その前に再来週に行われるクラス対抗戦の代表者を決めなければならぬな」

三限目の授業が始まり、教壇に立つ織斑先生は思い出したようにそのようなことを言いました。

クラス対抗戦？ クラス同士でサバイバルゲームでもやるのでしょうか？

「クラス代表はそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席。簡単に言えばクラス長だな。クラス対抗戦は入学時点での実力推移を測るものだ。現状では実力に差はないだろうが、競争は向上心を生み、実力を底上げすることが出来。一度決まれば一年は変更がないからそのつもりで」

織斑先生の説明でクラス中がざわつきます。誰をクラス代表にするかを相談しているみたいですね。  
自薦でしょうか他薦でしょうか？ 自薦だけならとても良いんですけど。ボクは立候補する気がないので。他薦なら少し嫌ですね。自分に意思に関係なく選ばれる可能性があるので、自分が選ばれてしまいかも知れません。自惚れている訳ではありませんよ。

「はい！！ 織斑くんを推薦します！！」

女子生徒の一人が元気良く手を上げます。生贄の名前を言うために。一人が手を上げると周りが釣られて手を上げます。

「私もそれが良いと思います」

「では候補者は織斑一夏。他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

織斑先生が言うには自薦他薦は問わないそうです。

「お、俺!？」

勢いよく席から立ち上がる織斑くん。クラス中からの注目を一身に受けます。その中にはボクの視線もあります。

授業中に席を立たない。皆さんの迷惑になりますよ。

「織斑、邪魔だから席に着け。自薦推薦は問わないと言ったはずだ。他薦されたものに拒否権はない」

抗議なんて織斑先生の前に持っていったらバツサリ切り捨てられちゃいますね。

「待ってくれ」

「待ってください!! 納得がいきませんわ!!」

織斑くんの抗議の声を遮り、異議を申し立てるのはオルコットさん。自信たっぷりであれこれ言っていたので、真っ先に立候補すると思っていたのですが。今になって自己主張を始めましたね。まあ、織斑くんにとっては救いでしょう。

わざわざ机を叩いてから立ち上がるオルコットさん。うーん、様になっっています。

「そのような選出は認められません！！ 大体、クラス代表に男を選ぶなんていい恥さらしですわ。わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと」

……良い提案があります。転校してみてもはどうでしょう。ああ、この学園以外にISを扱う教育機関なんてありませんでしたっけ？

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります。わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来たのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！！」

……あのー。

「いいですか。クラス代表は実力トップであるわたくしがなるべきですわ」

……えーっと。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと事態、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ」

織斑くんが怒っちゃいましたね。今まで我慢していたにはあんまり怒りを感じませんが。

けっこうなアンチ日本を聞かされましたけど、ボクとしては怒らなきゃいけない理由はないですね。愛国心がないのでしょうかね。それにしても売り言葉に買い言葉とはこの事なんですね。

「あ、貴方ねえ！！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

真つ赤に顔を染めて怒りを露にするオルコットさんにボクは自分だつて侮辱しましたよねっと思いました。決して口にはしません。口は災いの元と言いますから。

「決闘ですわ！！」

いちいち机を叩くオルコットさん。しかも決闘のお誘いみたいですね。わー、チヨーガンバツテクダサイ。

「おう、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

そこは言葉で解決しようよ。そんなんだから戦争が起こるんですよ。まあ、言葉で解決できないから戦争に発展するんでしょうけど。

「言っておきますけど、貴方達にも決闘を申し込みますわ」

びしつと此方を指差すオルコットさんにボク達は耳を疑ってしまいました。

ボクはすぐに後ろを向きます。そうすれば目の前にはニコニコと笑う遊樂がいました。

「なんでボク達に飛び火するんですかね？ 対岸の火事だと思っていましたか」

「気にするなよ。けっこう楽しそうな展開じゃないか。私は歓迎するぞ」

味方だと思っただけでしたが実は敵だったんですね、遊樂は。

「土下座でもして謝れば許さないこともありませんよ」

乗り気じゃないボクにオルコットさんが優しい提案を用意してくれます。

とても魅力的な提案にボクは席から立って、すぐに土下座をしよう  
とします。

「させるものかい!!」

良い笑顔でボクの動きを阻害する遊樂。本当に良い笑顔なので諦めるしかないんだな、と思いました。

まあ、周りの皆さんが戦いを見るのを喜んでくれるならやってみますか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3377y/>

---

IS 喜楽にいきましょう 改

2011年11月12日09時20分発行